

中小企業は進化する

中沢 孝夫 著
岩波書店

.....

評者

法政大学大学院イノベーション・マネジメント研究科教授
久保田 章市



企業で、最も大切なことは「継続」することである。顧客、従業員、株主などへの責任を全うし、社会や地域に貢献し続けるためには継続しなければならない。しかし、継続は容易ではない。長い間には経済環境も大きく変化するし、熾烈な企業間競争もある。財務体力がそれほど強固ではなく、人材も必ずしも十分ではない中小企業においてはなおさら難しい。本書は、そうした中小企業にあって、今、元気に活躍している中小企業は、厳しい時代をどのようにして生き抜いてきたかを、「進化」という視点から書いた本である。

著者は、ジャーナリズム出身で、大学で中小企業論を持つ研究者。その研究スタイルは、徹底した現場主義である。まずは現場に出かけ、経営者や従業員の話聞き、その上でそれぞれの共通点、異質性を概念化するという方法論。この20年間で、聞き取りを行った中小企業数は800社を超えるとのこと。本書は、こうした著者の豊富な現場体験と、中小企業研究者としての知識や研究実績をバックグラウンドとして書かれている。

著者の中小企業に対する基本認識は、「中小企業は植物」である。「動物」である大企業は、食べ物を求めてどこへでも大きく移動することができるが、「植物」である中小企業は、いったん根を生やしたらそこを動かすことができないから、と

というのが理由。『進化論』のチャールズ・ダーウィンは、「生き残る種は、最も変化に適應できるものである」と言っている。確かに、中小企業を「植物」と考えると、その地に根を生やし動くことのできない中小企業が生き残っていくためには、環境に適合し「進化」していくしかない、という著者の主張も納得できる。

本書は序章に続き、4章で構成されている。序章では、中小企業をポジティブに捉える著者の「中小企業観」が述べられている。第1章から第3章にかけては、中小企業が「進化」している様子を合計13社の事例で紹介している。そして第4章は、がらっと趣を変え、中小企業の実態と政策論である。

第1章は、地域経済を担う中小企業。ここでは7社が紹介されている。例えば、福井市の(株)秀峰。元信金マンが脱サラして1983年に起業した会社である。凹凸や曲面に印刷可能な機械を3年かけて開発。その後、製版技術を研究、改良し、ノキア、モトローラ、サムスンなどの携帯電話の表面印刷を受注。その後も技術開発を重ね、携帯電話のアンテナを印刷で取り付ける技術も開発、その技術は現在、キャッシュカードにも応用されている。鯖江市の(株)西村金属は、1968年の創業時はメガネフレームのネジの製造。その後、メガネフレーム全

体の製造も始め、売上げが落ちた1997年頃、チタンの微細加工技術を開発。今では半導体、医療機器、航空機などの部品加工を行っている。越前市のミツカワ(株)は1973年創業で、当初はメンズパンツの丸編み。1987年頃、丸編み技術を生かして「カーシート」を開発し車用品分野に、同時に「湿布用の布」を開発し医療分野にも進出。そして2004年には、ビルの屋上緑化などの環境分野に進出している。このように本章では、「技術」という経営資源を生かして事業転換を図り、地域経済を支えている中小企業を紹介している。

第2章は、中小企業の海外展開。「植物」の中小企業でも、親会社に伴い海外進出をせざるを得ないなどの場合もある。本章では3社の事例を紹介。例えば、蒲郡市の新日工業(株)は1947年創業で、当初は漁船の焼き玉エンジンの修理。パタパタ(原付自転車)の部品加工からホンダの仕事が始まり、その後、バイクのギア製造、オートマチック車のトランスミッションの切削と研磨などを行なう。ホンダの海外展開にあわせてタイ行きを検討。1998年、海外展開経験のある(株)ユタカ技研(浜松市)と合併会社を設立してタイに進出。岡谷市の(株)ソーデナガノは、板金プレスと金型製造の技術を持つトヨタの協力メーカー。1987年、最初にシンガポールに進出。その後、マレーシア、インドネシア、タイへと展開。それぞれの工場の相互交流を日本国内のように活発に行なっている、などが紹介されている。

第3章は、技術革新と研究開発による進化。本章では3社が紹介されている。例えば、駒ヶ根市の塚田理研工業(株)。1946年創業のメッキ業であるが、1966年にプラスチック・メッキを開発。婦人服のボタン、自動車のエンブレム、カメラ、携帯電話、医療機器など様々なプラスチック製品にメッキを行ない、今では取引先数は300社にも上る。また、早くから排水処理にも積極的に取り組み、2005年にはイオン交換式排水リサイクルセンターを建設。今後、工場に必要な水はすべてリサイクルで賄う計画。同じく駒ヶ根市の天竜精機(株)は1959年創業で当初は電子部品の組み立て。翌1960年に、治工具や金型製造を始め、3代目社長の現在は、自動車、電気、半導体などの各業界向けのオーダーメイド型自動機・専用機と標準機の製造を行なっている、などが紹介されている。

第4章は、中小企業の実態と政策論。中小企業にまつわる「偏見」と「誤解」を質しつつ、中小企業の実像が述べられている。また、政策論では、「二重構造論」以降の中小企業論について整理し、著者の見解が述べられている。

本書全体を通して感じたことは、著者の中小企業に対する熱い思いである。中小企業の中に「夢」と「希望」を見出し、中小企業に温かいエールを送っている。本書は、中小企業が今後進むべき方向について示唆を与えてくれると同時に、中小企業に関係する者に元気を与えてくれる書である。

本書を多くの人に勧めたい。